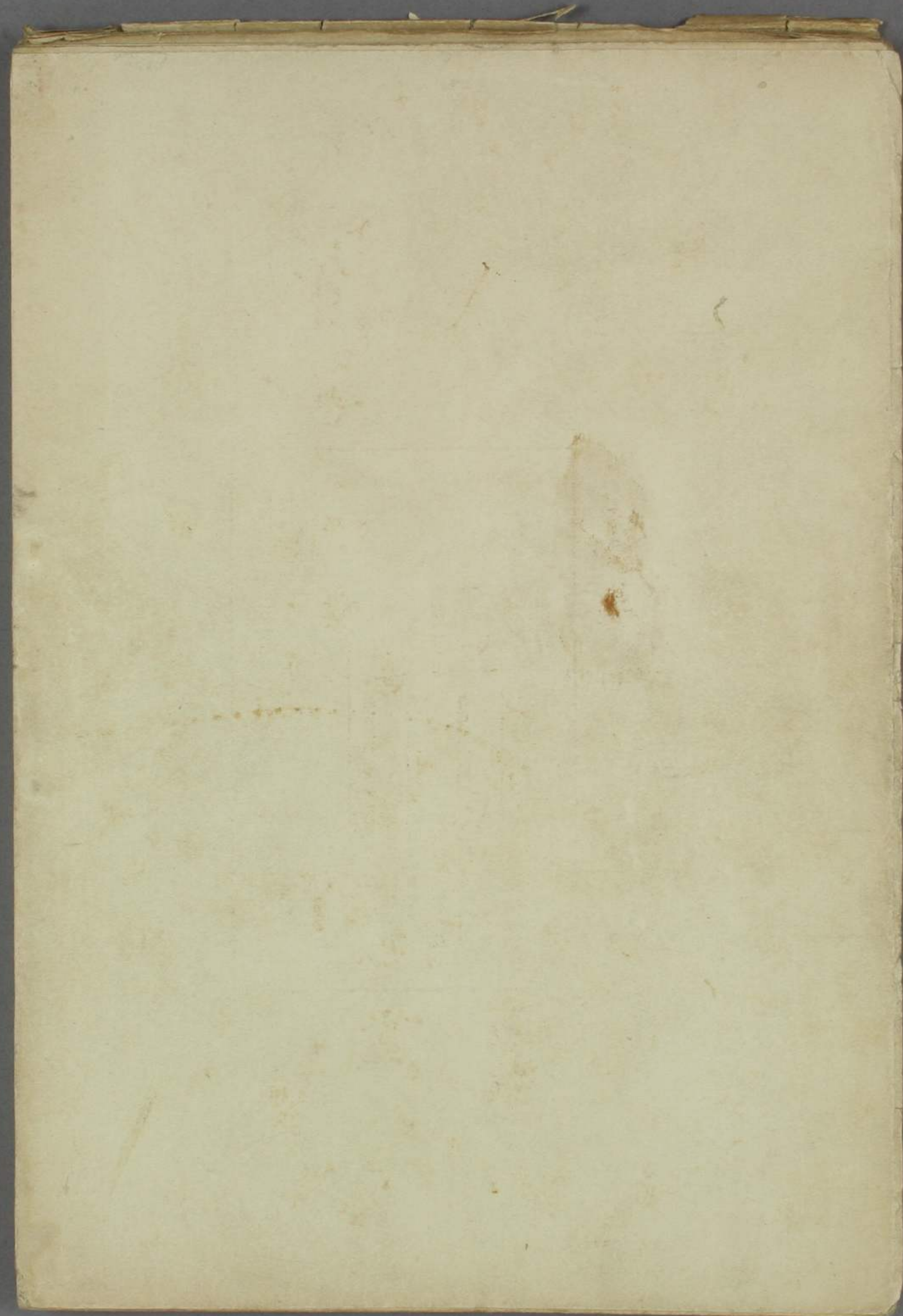


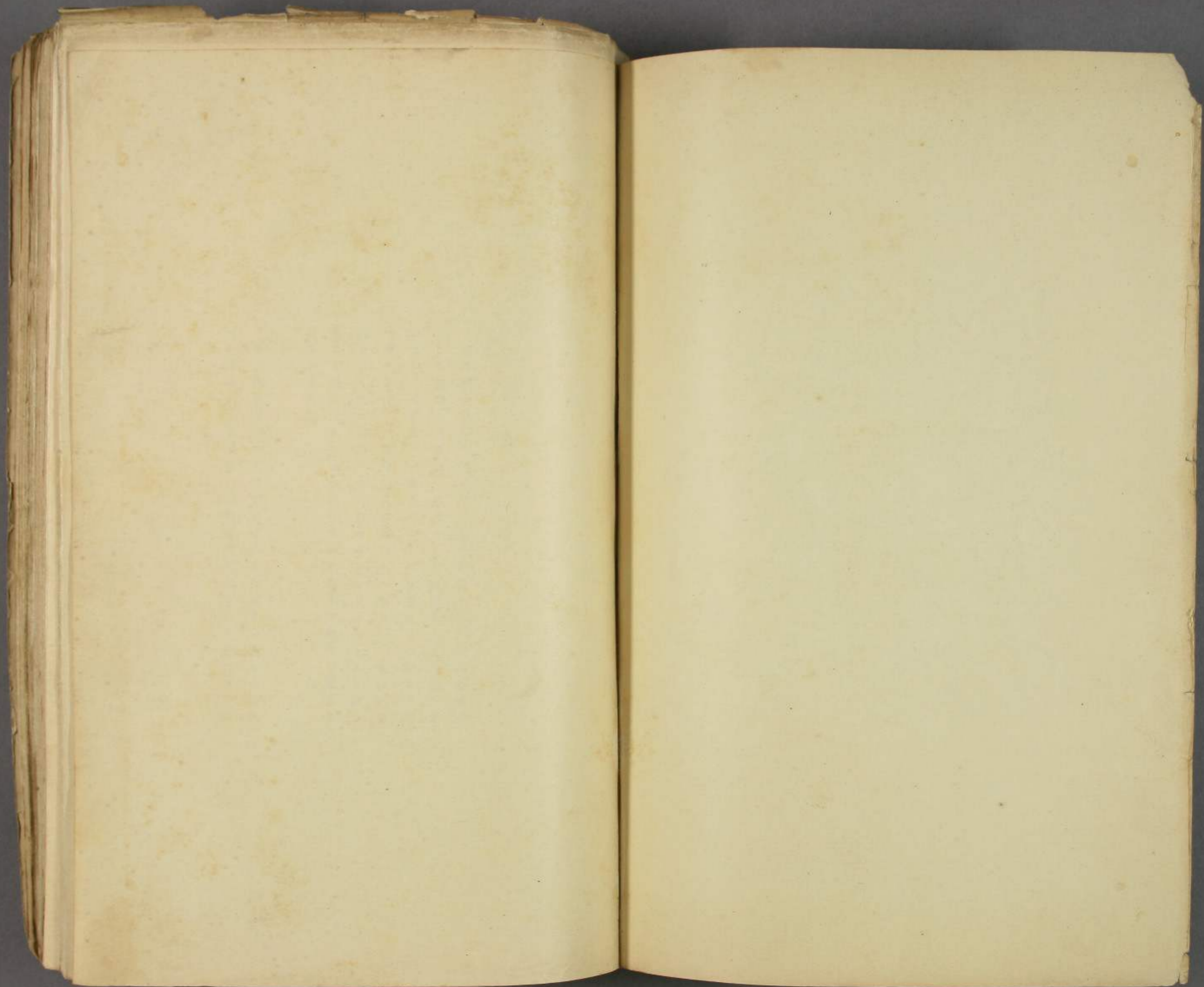
獨り歌へる

著水牧山若









自序

私は常に思つて居る、人生は旅である、我等は忽然として無窮より生れ、忽然として無窮のおくに往つてしまふ、その間の一歩々々の歩みは實にその時のみの一歩々々で、一度在いては再びかへらない、私は私の歌を以て私の旅のその一歩々々のひゞきであると思ひなして居る、云ひ換へれば私の歌はその時々私の命の碎片である。

多人数のなかに交り都合よく社會に身を立て、行かうがために、私は私の境遇その他からいつ知らず二重

或は三重の性格を添へて持つやうになつて来た、その中には眞の我とは全然矛盾し反對した種類のものがある、自身にも能くそれに氣がついて時には全く耐へ難く苦痛に思ふ、而も年の進むと共に四六時中眞の我に歸つて居る時としては愈々少くなつて来た、稀しくも我に歸つてしめやかに打解けて何等憚る所なく我と逢ひ我と語る時は、實に誠心こめて歌を咏んで居る時のみである、その時に於て私は天地の間に僅かに我が影を發見する。

藝術々々とよく人は言ふ、實のところ私はまだその藝術と云ふものを知らない、斷えず自身の周圍に聞い

て居る言葉でありなからいまだに了解が出来難い、だから私はそれ等一切の關係のなかに私の歌を置くことが出来なかつた、私は原野にあそぶ百姓の子の様に、山林に棲む鳥獸のやうに、全くの理屈無しに私の歌を咏み出で度い。

私は私の作物を以て、斯うして生れて来た自己の全てをみづから明かに知らむがための努力である、今のごころでは思つて居る、それ以上他に思ひ及ぼす餘裕が無い、歌を咏むのも細工師が指輪や簪をこしらへて居るのとは違つて、自己そのものを直ちに我が詩歌なりと信じて私は咏んで居る、歌と言ふもの詩と言ふも

のさいふ風に机の上にぶち轉がして考へらるゝことを
私は痛く嫌ふ、自己即詩歌、私の信念はこれ以外に無
し。

一首々々取出して見ると私の歌などは實に夥しく拙
い、技巧の不足なもの、内容の空虚なもの、嘘をつい
て居るものなどばかりで、自ら満足し得るものとは
殆ど絶無である、それかと云つて全然是等を棄却し去
ることは容易に出来ない、一首のうちは何處か自分の
影が動いてゐて、なか／＼思ひ切つて棄てがたい、い
ま夫等を拾ひ集めてこの一卷を編んだ、これいぢらも尙
ほ私が本當に生きて居る間、私は何處までもこの哀は

(五)

れな歩をとほ／＼と續けて行かねばならぬのであらう。

(五)

歌の配列の順序は、出来るだけ歌の出来た時の順序
に従ふやうに力めた、前の歌集「海の聲」の編輯を終つ
たのが昨年の四月の廿日頃で、それから作はたしか
同月廿五日の夜武蔵百草山に泊つた時を以て始つて居
る、そして本書の編輯を終つたのは本年七月の十日頃
偶然にも同じ百草山の頂上の家に滞在して居る時に於
てゝあつた、つゞまりこの「獨り歌へる」一卷はその
間約一ケ年に亘る私の内的生活の記である、その時
その時に過ぎ去つた私の命の碎片の共同墓地である。

詩歌書類の一向に賣れない現今にあつて、特にわがために本書出版の勞をとられた八少女會同人諸君に對し深く感謝する。

今夜は陰曆九月十三日、後の月の當夜で、風牙えて時雨が時々空を過ぐる、街をば伊藤公暗殺の號外が切りに走つて居たが既にそれも止んだ、本書の校正刷を閲しこの序文を認めて、自身の昨日の歌を見て居るこ色々と思ふことが多い。

明治四十二年十月廿六日深夜

若山牧水

(六)

獨り歌へる 上の卷

自明治四十一年四月
至全 十二月

(一)

若山牧水

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに
君は耐ふるや
みんなみの軒端のそらに日輪の日ごとかよふを見て
君と住む

おのづから熟みて木の實も地に落ちぬ戀のきはみに
いつか來にけむ

女あり石に油をそゝぎては石焼かむとす見るがさび
しき

いざ行かむ行術は知らねどまらばかなしかりなむ
いざ君よ夙く

何はかきあはれみ請ふるその陣の先づこそ見ゆれえ
はうらむべき

(三)

若ければわれらは哀し泣きぬれてけふもうたふよ戀
ひ戀ふる歌

(三)

斯くねたみ斯くうたがふがわが戀のすべてなりせば
など死なざらむ

うらかなしこがれて逢ひに來しものを驚きもせでひ
どのほゝゑむ

悲しませ泣かずわらはぬ晝夜に馴れしかいまはさび
しくもなし

うちしのび夜汽車の隅にわれ座しぬかたへに添ひて
ひとのさしぐむ(以下或る時に)

野のおくの夜の停車場を出でしときつどこそ接吻を
かはしてしかな

摘みてはすて摘みてはすてし野のはなの我等があと
にとほく續きぬ

山はいま遅き櫻のちるころをわれら手とりて木の間
あゆめり

(四)

(五)

鬢の毛に散りしさくらのかゝるあり木のかげ去らぬ
ゆふぐれのひと

木の芽摘みて豆腐の料理君のしぬわびしかりにし山
の宿かな

春の日の満てる木の間のうち立たすおそろしきまで
ひとの美し

小鳥よりさらに身かるくうつくしく哀しく春の木の
間ゆく君

静かなる木の間にともに入りしときこゝろしきりに
君を憎めり

君すてゝわれたゞひとり木の間より岡にいづれば春
の雲見ゆ

山の家の障子細目にひらきつゝ山見るひとをかなし
くぞ見し

ゆく春の山に明う雨かせのみだるゝを見てさびしむ
ひとよ

(六)

狭みどりのうすき衣をうち着せむくちづけはてゝ夢
見るひとに(以上)

(七)

古寺の木立のなかの離れ家に棲みて夜ごとに君を待
ちにき

ものごしに静けさいたく見えまざるひとゝ棲みつゝ
はつ夏に入る

椎のはな栗の木の花はつ夏の木の花めづるひとのは
つれ毛

あな胸のそこひの戀の古海の鳴りいづる日を初夏の
雲湧く

樹々の間に白雲見ゆる梅雨晴の照る日の庭に妻は花
植う

くちつけをいなめる人はやゝどほくはなれて窓に初
夏の雲見る

わが妻はつひにうるはし夏たてば白き衣きてやゝ瘦
せてけり

香爐さゝげ初夏の日のわらはたち御そらおもゆり日
の静かなる

はつ夏の雲あをそらのをちかたに湧きいづる晝夢の
笛吹く

燐枝すりぬ赤き毛蟲を焼かむとてたゞ何となくくる
しきゆふべ

どこしへに解けぬひとつの不可思議の生きてうごく
と自らをおもふ

このごろは逢へばかたみに繪そらごとたくみにいふ
と馴れそめしかな

別れてきさなりき何等ことなげに別れきその後幾夜
経ぬるや

あめつちに頼るものなしわがなみだなにいたづらに
頬をながれたる

はたゝ神遠鳴りひゞき雨降らぬ赤きゆふべをひとり
酒煮る

夕されば風吹きいでぬ間のうちの樹梢見るつゝまた
おもひつぐ

われひとり暮れのこりつゝ夕やみのあめつちにゐて
君をしぞおもふ

夕やみのやゝに明るみ大ぞらに月のかゝればやゝ思
ひ風ぐ

ひとりなればこのもちつきの夏の夜のすゞしきよひ
をいざひとり寝む

八月の初め信州輕井澤に遊びぬ、その頃
詠める歌三十五首、

火を噴けば淺間の山は樹を生まず茫として立つ青天
地に

天地の静寂わが身にひたせまるふもと野に居て山の
火を見る

八月や淺間が嶽の山すそのその荒原にどこなつの咲
く

(三)

麓なる山のひとつのいたゞきの深草のなかゆ見し淺
間山

(三)

夕空の風をしぞおもふ火の山のけむりは遠くうちな
がれたり

夢も見ず旅寝かさねぬ火の山の裾の月夜の白き幾夜
を

火の山の裾の松原月かげの疎き月夜をほとゝぎす啼
く

火の山やふもとの國に白雲の居る夜のそらの一すぢ
の煙けむり

大ぞらに星のふる夜を火の山の裾に旅寝し妻をしぞ
思ふ

夜となればそらを掩ひて高く見ゆ白晝あきは低しけむり
噴く山

夜の山のけむりにやどりうす赤う地つちのそこなる火の
かげの見ゆ

火の山にしばし煙の断えにけりいのち死ぬべくひと
のこひしき

女ありみやこにわれを待つときく斯くおもひつゝ山
の火を見る

月見草見あつゝ居ればわかれ來し妻が物思ふすがた
しぬばゆ

黒髪くろかみのそのひとすぢのこひしさの胸にながれて盡き
むどもせず

わかれ来て幾夜経ぬると指折れば十指に足らず夜の
ながさかな

ゆるしたまへ別れて遠くなるまゝにわりなきまゝに
うたがひもする

青草のなかにまじりて月見草ひどもと咲くをあはれ
みて摘む

あめつちにわが聲音のみ滿ちわたる夕さまよひに月
見草摘む

(一六)

ものをおもふ四方の山べの朝ゆふに雲を見れどもな
ぐさみもせず

紅滴る桃の實かみて山すその林ゆきつゝ火の山を見
る

蟲に似て高原はしる汽車のありそらに雲見ゆ八月の
晝

白雲のいさよふ秋の峰をあふぐちひさなるかな旅人
どもは

(一七)

糸のごとくそらを流るゝ杜鵑あり聲にむかひて涙と
ゞまらず

うつろなる胸をいだきつ眞晝野にわが身うごめき杜
鵑聴く

ほどゝぎす聴きつゝ立てば一滴のつゆより寂しわれ
生きてあり

あめつちの亡び死になむあかつきのしゞまに似たり
杜鵑啼く

わかれては十日ありえずあわたゞしまた碓氷越え君
見むと行く

胸にたゞ別れ來しひとしのばせてゆふべの山をひと
り越ゆなり

さらばなり信濃の國のほどゝぎす碓氷越えなばまた
聞かめやも

瞰下せば霧に沈めるふもと野の國のいづくぞほどゝ
ぎす啼く

ふと聞こゆ水の音とほし木の蔭に白百合見出でなが
めいるとき

身じろがすしばしがほそを見かはせり旅のをとこと
山の小蛇と

秋かせや碓氷のふもと荒れ寂びし坂本の宿の糸繰の
唄 (坂本に宿りて)

まひる日の光のなかに白雲はうづまきてゆくふもと
國原 (妙義山にて)

旅びとはふるきみやこの月の夜の寺の木の間を飽か
すさまよふ (三首奈良にて)

はたご屋へ杜の木の間の月の夜の風のあはれに濡れ
てかへりぬ

伏しをがみふしをがみつゝ階のゆうべのやみにさえ
よとぞおもふ

大いなるうねりに船の載れるとき甲板にゐて君をお
もひぬ (播磨灘にて)

いと遠く君がうまれし國の山ながめてわれは帆柱に
凭る (瀬戸の海にて)

雲去ればものゝかげなくうす赤き夕日の山に秋風ぞ
吹く (四首故郷にて)

峰あまた横ほり伏せるふもどなる河越えむとし蜩を
聞く

父の髪母の髪みな白み來ぬ子はまた遠く旅をおもへ
る

(三)

一人のわがたらちねの母にさへおのがこゝろの解け
すなりぬる

(三)

とき折りに淫唄うたふ八月の燃ゆる濱ゆき燃ゆる海
見て (日向の海邊にて)

星くづのみだれしなかにおほどかにわが帆柱のうち
揺ぐ見ゆ

蓄音機ふとしも船の一室に起るがきこゆ海かなしけ
れ

なにもものに欺あざむかれ來しやこの日ひごろくやし腹はら立たし
秋風を聴く

秋立てどよそよそしくもなりにけり風は吹けども葉
は落つれども

忘れ得ずさびしきまゝにまたしてもさびしかりしを
思ひつゞくる

ども思ひかくもおもへどどにかくにおもひさだめて
幸さいはひ秋あきせむ

いねもせで明かせる朝の秋かせの音にまじりてすゞ
め子の啼く

うらさびし盡つきなく行ける大河おほなほのほとりにゆきて泣
かむとぞおもふ

開ひらかれしこよひ籬かき根ねのこほろぎの身にしむまゝに出い
で、聴くかな

地のそこに消えゆくどかもひ中なかつぞらにまよふともさ
こゆ長なが夜よこほろぎ

霧ふればけふはいつより暮はやきゆふべなりけりこ
ほろぎのなく

時として涙をおぼゆ草木の悠々として日を浴ぶる見
て

消えやらぬ大あめつちの生物のひとつわれに秋か
せぞ吹く

君がいふ戀のこゝろどわがおもふ戀のさかひの一す
ぢの河

(三)

白粉と髪のはひをきゝわけひ静かなる夜のともし
びの色

いと拙き歌さくごとし秋の夜のしづかなる夜に君怨
言いふ

かきたまへうらみつらみもこのころのわれらに何の
興かあるべき

秋立てばよく逢ふ夜なり灯のかげになみだながれて
わりもあきこと

夕ぐれの街をし行けばそゝくさど行きかふ人に眼も
鼻も無し

わが胸に旅のをどこの情なしのこゝろやどりてそゝ
のかすらく

物おもへばたゞ茫漠のあめつちにわれたゞ獨り生く
とさびしき

秋たてば街のはづれの楢の木の本立に行きてよくも
のをおもふ

秋はものゝひとりひとりをかしけれ空ゆく風もま
たひとりなり

わがこゝろ行くにまかせてゆかしめよ世にこれより
のなぐさめは無し

蠟燭の灯の穂赤きをつくづくと見つめゐてふと秋風
をきく

めぐりあひしづかに見守りなみだしぬわれどわれど
のこゝろどこゝろ

秋晴のまちに逢ひぬる乞食の爺の眸見て海をおもひぬ

牛に似てもものもおもはず茫然と家を出づれば秋かせの吹く

午すぎのつかれごゝろにとぼとぼとうつり來あはれひとの戀しさ

野菊ぞとさも媚びなよるすがたして野に咲く見れば行きもかねつる

湯槽より窓のガラスにうつりたる秋風のなかの午後の日を見る

落初めの桐のひと葉のあををどひろきがうへを夕風のゆく

人の聲車のひゞき満ちわたるゆふべの街に落葉ちるなり

眼とづればはるかにとほくとぼとぼと日に追はれゆくわがすがた見ゆ

秋かせは空をわたれりゆく水はたゆみもあらず葦刈
る少女

足とめて聴けばかよひ來河むかひ枯葦のなかの葦刈
りの唄

魚釣るや晩秋河のながれ去り流れさる見つゝ餌は取
られがち

わたの原生れてやがて消えてゆく浪のあをきに秋か
せぞ吹く

(100)

相むかひ世に消えがたきかなしみの秋のゆふべの海
どわれとあり

(101)

ゆふぐれの沖には風の行くあらむ屍のごとく松にも
たるゝ

音もなうゆふべの海のをちかたの闇のなかゆく白き
波見ゆ

行き行きて飽きなば旅にしづやかにかへりみもなく
死なむとぞおもふ

ひたすらに君に戀しぬ白菊も紅葉も秋はものゝさびしく

病みぬれば世のはかなさをとりあつめ追はるゝがごと歌につゞりぬ

あれ見たまへこのもかのもの物かげをしのびしのびに秋かせのゆく

わかれては昨日も明日もおどつひも見えわかずしてひたに戀しき

(三)

少女子のむねのちひさきかなしみに溺れてわれは死にはてしかな

戀ひに戀ひすさみはてぬるわが胸に植うべき花をなにとさだめむ

君見れば獸のごとくさいなみぬこのかなしさをやるところなみ

なほ飽かすいやなほわかす苛みぬ思ふまゝなるこの女ゆゑ

(四)

長椅子ながいすにいねて初冬はつふゆ午後ごごの日ひを浴あぶるに似にたる戀こづ
かれかな

なにものに追おはれ引ひかれて斯かく走まるをもしろきこと
世よに一ひともなし

あらくかに梢かたの枯葉かうち落おし庭掃にわく僧そうのその面おもがま
へ

とぼとぼとありし若わかさのわがむねにかへり來くるなり
君きみをいだけば

この林檎りんごつゆしたゝらばありし日のなみだに似にむと
わかき言こといふ

あはれそのをみなみなの肌はだしらすして戀このあはれに泣なき
ぬれし日ひよ

あはれ神かみただあるがまゝわれをしてあらしめたまへ
他たにいのる無し

かゝる時聲ときこゑはりあげてかなしさを歌うたふ癖くせありきそれ
も止とみつる

わが住むは寺の裏部屋庭もせに白菊さけり見に来よ
女

消えもせず戀の國より追はれ來し身にうつり香のあ
はくかなしく

見かへるな戀の世界のたふどさは揺れずしづかに遠
ざかりゆく

世に最もあさはかなればどりわけて女の泣くをあは
れどぞおもふ

黒牛の大いなる面どむかひあひあるがとどくに生く
につかれぬ

ほこり湧く落日の街をひた走る電車のすみのひとり
の少女

仰ぎみてこゝろどながる街の樹の落日のそらにおち
葉するあり

道化者つらの可笑しきあの友が戀にやつれてやゝ瘦
せてけり

われうまれて初めてけふぞ冬を知る落葉のこゝろな
つかしきかな

落ちし葉のひと葉のつぎにまた落ちむ黄なる一葉の
待たるゝゆふべ

あめつちの静かなる時そよろそよろ落葉をわたる也
ふぐれの風

はつ冬のころのならひの曇り日は落葉のこゑのなつ
かしきかな

(80)

(81)

早やゆくかしみじみ汝にうちむかふひまもなかりき
さらばさらば秋

忍び来てしのびて去にぬかの秋は盲目なりけりもの
いはざりき

大河のうへをながるゝ一葉のおち葉のごとしものも
おもはず

わが妻よわがさびしさは青のいろ君がもてるは黄朽
葉ならむ

めぐりあひふと見交して別れけり落葉林のをどこと
男 (月山ヶ原にて)

冬木立落葉のうへに晝寝してふと見しゆめのあはれ
なりしかな

武蔵野は落葉の聲に明け暮れぬ雲を帯びたる日はそ
らを行く

ありのすさび落葉のなかに見いでつる松かさの實を
手にのせてみぬ

(111)

かすかなる胸さわぎこそたへられぬ黄葉ふりしきる
冬枯の森

(112)

いかにせむ胸に落葉の落ちそめてあるがごときをお
もひ消しえず

ふりはらひふりはらひつゝ行くが見ゆ落葉がくれを
ひとり男

木の葉みな落ちつくしたる寒林は斯のごときことお
もふによるし

いと静かにものをぞおもふ山白き十二月こそゆかし
かりけれ

梢より葉のちるごとくものおもひありとしもなきに
むねのかなしき

なにどなくさびしうなりぬわが戀は落葉がくれをさ
まよふごとく

荒れはてし胸のかたへにのこりぬるむかしのゆめの
うす青の香よ

(三五)

うす赤く木枯すさふ落日の街のはこりのなかにおも
はく

(三六)

窓あくればおもはぬそらにしらじらと富士見ゆる家
に女すまひき

日向ぼこ側にねむれる犬の背を撫でつゝわれはさび
しうなりぬ

近きわたり寺やたづねてめぐらなむ女を棄てゝやゝ
さびしかり

別る、日君もかたらずわれ云はず雪ふる午後の停車
場にあり

別るとて停車場あゆむうつむきのひとの片手にグイ
オロンの見ゆ

別れけり残るひとり停車場の群集ぐんしゅうのなかに口笛くちふえを
ふく

獨り歌へる 上の巻終り

獨り歌へる 下の巻

昭和十二年一月

大島おほしまの空を行くことさやりなき懸かするひとも新くや
嘆なげかむ

男おとこといふ世に大いなるかさをかのほこりに如ごとかむか
ましまありや

別る、日君もかたらずわれ云はす雪ふる午後の静寂
胸にあり

胸をどて停車場あゆむうつむきのひとの片手はグイ
オロゾの見ゆ

別れけり寝るひどりは停車場の群集のなかに口笛を
ふく

獨り歌へる

獨り歌へる 下の巻

自明治四十二年一月
至同 七月

大鳥オオトリの空そらを行くことさやりなき戀するひども斯くや
嘆かむ

男おとこといふ世に大おほいなるおこそかのほこりに如ごとかむか
なしみありや

ほのかにもおもひは痛しうす青の一月のそらに梅つ
ほみ來ぬ

うきことの限りも知らずふりつもるこのわかき日を
いざや歌はむ

清ければ若くしあればわがこゝろそらへ去なむとけ
ふもかなしむ

ゆめのごとくありのすさびの戀もしきよりどころな
くさびしかりしゆゑ

枯れしち最もあはれ深かるは何花ならむなつかし
きかな

男なれば歳二十五のわかければあるほどのうれひみ
な來よとおもふ

斯くばかりこゝろ弱かりいつの日にわが悲しみの盡
きむとすらむ

けだものゝ病めるがごとくしづやかに運命のあとに
従ひて行く

一月より二月にかけ安房の濱に在りき、
その頃の歌七十五首。

ふね待ちつ待合室の雑沓に海をながめて巻たばふ吹

く
思ひ屈し古ぼる船に魚買の群れどまじりて房州へ行

武藏野の岡の木の間に見なれつる富士の白さをけふ
海に見る

(五〇)

物ありて追はるゝごとく一人の男きたりぬ海のはど
りに

(五一)

病院の玻璃戸に倚れば安房の海のあなたに伊豆の山
焼くる見ゆ

まつ風の明るき聲のなかにして女をおもひ青海を見
る

なにはせのことにやあらむ夜もいねで海のはどりに
人の嘆くは

われひとり多く語りてかへり來ぬ月照る松のなかの
家より（人を訪ねて）

どもすれば略くに馴れぬる血なればとこどもなげに
も言ひたまふかな（おなじき時に）

海に來ぬ思ひわぐみてよるべなき身はいづくにも捨
てどころなく

とやかくに思ひひがめてわれとわが清きこゝろを蝕
みもかむとす

(五)

病むごとしけふもねがての枕べに這ひまつはれる海
のひゞきは

藻草あそくさ焚たく青さけむりを透きて見ゆ裸はだか体の海女あまと暮れ
ゆく海と

われよりもいさゝか高きわか松の木かげに立ちて君
をおもへり

朝起きて煙草しづかにくもらせるしばしがほどはな
にも思はず

(五)

日は日なりわがさびしさはわがのなり白晝まひるなぎさの
砂山に立つ

こゝよりは海も見えざる砂山のかげの日向ひなたにもものを
おもひぬ

いづかたに行くべきわれはこゝに在りこゝろ落ち居ゐ
よわれよ不安あやふよ

風落ちて渚木立に満ちわたる海のひゞきの白晝ひるのか
なしみ

きさらぎや海にうかびてけむりよく寂しき島のうす
霞みせり

火の山にのぼるけむりにむかひゐてけふもさびしさ
ひねもすなりき

大島の山のけむりのいつもいつもたえずさびしさわ
がこゝろかな

晴れわたる大ぞらのもど火の山のけむりはけふも白しろ
々どたつ

夕やみに白帆を下す大船の港入りこそやゝかなしけれ

けふは早や戀のはかなるかなしみに泣くべき身とも
なりそめしかな

海よわれ思ひあまればいつもいつも汝をしたひて來
て泣くものを

梅はたゞ一もどがよしどりわけてたゞ一輪の白きが
よろし

(五〇)

君もまたくるしきときに君おもふ薄情者をどがめた
まふや

(五七)

少年のゆめのころもはぬがれたりまこと男のかなし
みに入る

あはれこゝろ荒みぬればか眼も見えず海を見れども
目を仰げども

人見れば忽ちうすき皮を着るわが性ゆるゑの盡きぬさ
びしさ

天地に享けしわが性やうやうに露はになり來海に來ぬれば

つひにわれ藥に飽きぬ酒こひし身も世もあらず飲みて飲み死なむ

やまひには酒こそ一の毒といふその酒ばかり戀しきは無し

あさましく酒をたふべて荒濱に泣き狂へども笑ふ人もなし

(五)

愚かなり阿呆鳥の啼くよりもわがかなしみをひとに語るは

(五)

あめつちにわが残り行くあしあどのひとつづゝぞと歌を寂びしむ

わがこゝろ濁りて重きゆふぐれは軒のそとにも行くをこのます

けふもまた變ることなきあら海の渚を同じわれがあゆめり

安房の國海にうかびて冬知らず紅梅白梅いまさかり
なり

けふ見ればひとがするもゑわれもせしをかしくもな
き戀なりしかな

おなじくは弱き男のいづくまでよわかるものかわれ
試しみむ

海に行かばなぐさむべしとひた思ひこがれし海に來
は來つれども

耳もなく目なく口なく手足無きわやしきものとなり
はてにけり

眼覺めつるその一瞬のわたらしきおのれを見出で慄
然と泣く

心より歌ふならねばいたづらに聲のみまよふ宵をか
なしむ

海をくわまたの山等横伏せりわが泣くどころいま
だ盡くる無し

やどかりの殻かの如ごとくに生なるかぎりわれかなしみをえ
は捨てざらむ

なつかしく静かなるかな海の邊の松かげの墓にけふ
も來りぬ

このおろは夜半よにぞ月のいづるなりいねがての夜も
よくつゞくかな

いつ知らず生なれし風の月の夜の明けがたちかく吹く
あはれなり

物かげに息をひそめて大風の海に落ちゆく太陽を見
る

蛩が家に旅寝をすれば荒海の落日いりひにむかひ風呂桶を
据す也

蛩が家に旅寝かさねてうす赤き楮の火かげに何をお
もふか

白々どかゞやける浪ひかる砂白晝ひのなぎさに巻煙草まきたばこ
吸ふ

いたづらにものを思ふとくせづきてけふもさびしく
渚をまよふ

青海の鳥の啼くよりいや清くいやかなしきはいつれ
なるらむ

これもまたあざむきならむ「いざ行かむ清きあなたへ」
海のさそへど

砂山の起き臥ししげきあら濱のひろきに出で、白晝
の海聴く

(22)

いと清きものゝあはれにおもひ入る海のはどりの明
るき木立

(23)

砂山のばらばら松の木のもとに冬の日あびてものを
おもふは

わがほごのちひさきものゝかなしみの消えひどもせ
ず天地にあり

好かざりし梅の白きをすきそめぬさびしきことのお
はき春かな

をぼるおぼる海の風げる日海こえてかなしきそらに
白富士の見ゆ

海のあなたおぼるに富士のかすむ日は胸のいたみの
つねに増しにき

安房の國の朝のなきさのさゞなみの音のかなしさや
遠き富士見ゆ

うちよせし涙のかたちの砂の上に残れるあどをゆふ
べさまよふ

思ひ倦めば晝もねむりて夢を見きなつかしかりき海
邊の木立

おぼる夜や水田のなかの一すぢの道をさわめき我等
は海へ

おぼる夜のこれは夢かも渚にはちひさき音の断えす
まろべる

おぼる夜の多人數なりしそがなかのつかね髪なりし
ひとを忘れず

日は黄なり灘なだのうねりの濁れる日敗ひぢ残者ざんじやはまた海に
浮く

男なり爲すべきことはなしはてむけふもこの語かたに生
きすがりぬる

鳥が啼く濁れるそらに鳥が啼く別れて船の甲板かたはに在
り

わかれ来て船の碇いかりのくさり綱つな錆びしがうへに腰かけ
て居り(以上)

(三)

このまゝに無口者むくちやとなりはてむ云ふべきことはみな
腹立はらたたし

おのづからこゝろはひがみ眼もひがみ暗くらきかたのみ
もどめむとする

角つうもなく眼なき數十の黒牛にまじりて行かばやゝな
ぐさまむ

鉛ななすおもきこゝろにゆぐれの闇のふるよりかな
しきは無し

(三)

たゞ一つ黒きむくろぞ眼には見ゆおもひ盡きては他
にもものもなし

思ふも憂^うしおもはねばなほたへがたし思ふとてまた
なにをおもはむ

戀といふうるはしき名にみづからを欺くことにはやゝ
つかれ來ぬ

いふがごと戀に狂へる身なりしがこゝろたえせずさ
びしかりしは

おほぞらのたそがれのかげにさそはれて涙あやふく
なりそめしかな

なにごともこゝろひとつにおさめおきてひそかに泣
くに如くことは無し

おはれまたわれうち棄てゝわがこゝろひとのなさけ
によりゆかむとす

戀もしき歌もうたひきよるべなきわが生命^{いのち}をば欺か
むとて

かりそめの己おのれがなさけに神かけていのちさゝぐる見
ればあはれなり

つゆはとも醉ふこと知らぬうるはしき女をけふもも
てあそべども

月見草咲くよりあはく戀ざめの胸にはのかにあはれ
みの萌もゆ

あさましき歌のみおほくなりにけりもの、終りのさ
びしきなかに

いかにして斯くは戀ひにし狂ひにし不思議ふしぎなりきと
さびしく笑ふ

狂ひ鳥目を追へるよりあはれなり行衛ゆきゑも知らずひと
の迷へる

わがいのち安かりしかなひとが泣きひとが笑ふにう
ち混まりぬて

爪つま延のびびぬ髪も延のびび来きぬあめつちの人にまじりてわれ
も生なくなり

心いよ、獨りをおもふ身にしみていよいよひとのな
さけしげきまゝ

よるべなき生命生命のさびしさの満てる世界にわれ
も生くなり

うちたえて人の覺音の無かるべき國のあらじや行き
て死なまし

よそ目には石のくれなどそれよりも物おもひなき身
と見えつべし

(10)

斬くつねに胸のさわがばひろめ屋の太鼓うちにもな
らましものを

(11)

行くところどさまかうさま亂れたるわかきいのちに
悔を知らすな

酒飲まゞ女いだかば足りぬべきそのさびしさかその
さびしさか

沈丁花みだれて咲ける森にゆきわが戀人は死になむ
とらふ

大天地みどりさびしくひそまりぬ若き男のしづかに
愁へる

汚れせずわかき男のたゞひとりこのあめつちをいかに
歩まむ

青わだつみ遠くうしほのひゞくより深しするぞし男
のうれへる

水いろのうれひに満てる世界なりいまわがおもひほ
しいまゝなる

降ると見えすしづかに青き雨ぞふるかなしみつかれ
男ねむれる

ニコライの大釣鐘の鳴りいでゝ夕さりくればつねに
たづねき

酒飲まじ煙草吸はじとひとすぢに妻をいだきに友の
がれたり

この器具さびしきひとの朝夕につかへていかにさび
しかるらむ(煙草入を贈られしと)

消^き息^きもたえてひさしき落^お魄^はの男をいまだ覺えたまふ
や (つぎ四首さる人のしとこ)

おもへらく君もひとりのおめつちに迷ひてよるべわ
らざらむひと

うす暗きこのあめつちの或るところ君在りどふをつ
ねにわすれず

君おもへばわたりあまりにかゞやかすゆふぐれさ
の如^{ごと}なつかしき

(五)

あらためてまことの戀をとめ行かむ來^こしかたあまり
さびしかりしか

(六)

戀なりししからざりしか知らねどもうさことしげき
ゆめなりしかな

いざ行かむいづれ迷ひは死ぬるまでさめざらましを
なにかへりみむ

歸らずばかへらぬまゝに行かしめよ旅に死ぬよとや
りぬこゝろを

どこしへにけふのいのちの花やかさかなしさを君忘
るゝなかれ(哀果の新婚に)

聲あはせて歌をうたへり春の日の四辻(よつぎ)にして救世軍(きうせいぐん)
は

真晝(まひる)日の小野の落葉の木の間もきあるかなきかの春
にかなしむ

春は來ぬ落葉のまゝにしづかなる木立がくれをそよ
風のふく

安房の國海のなぎさの松かげに病みたまふぞとけふ
もおもひぬ

海に沿ふ松の木の間の一すぢのみちを獨りしけふも
歩むか

君が住む海のはどりの松原の松にもたれて歌うたは
まし

山さくら咲きそめしとや君が病む安房の海邊の松の
木の間に

憫れまれあはれむといふあさましき戀の終りに近づきしかな

かなしきはつゆ掩ふなくみづからをうちさらしつゝなほ戀ひわたる

飽き足らぬふしのみしげき戀なりきそのまゝにして早や逝かむとや

はや夙くもこゝろ覺めるし女かとおもひ及ぶ日死もなぐさませ

女なればあはれなればと甲斐もなくくやしきもげに許し來つるかな

憫れぞとおもひいたれば何はおき先づたへがたく戀しきものを

逃れゆく女を追へる大たわけわれぞと知りて眼眩むごとし

斯くてなほ女をかばふ反逆のこゝろが胸にひそむといふは

なにか泣くみづからもわれを欺きし戀ならぬかは清
く別れよ

唯だ彼女が男のむねのかなしみを解し得て去るをわ
はれにおもふ

林なる鳥と鳥とのわかれよりいやはかなくも無事な
りしかな

千度び戀ひ千度びわかれてかの女けだしや泣きしこ
と無かるらむ

別れゆきふりもかへらぬそのうしろ見居つゝ呼ばす
泣かすたゝすむ

鼻のしたながきをほこる汝とて斯くは清くも棄てら
れつるか

別るとて冷えまさりゆく女にはわが泣くつらのいか
にうつれる

山奥にひとり獸の死ぬるよりさびしからずや戀終り
ゆく

やみがたき憤りいさよほより棄てむとす男のまへに泣くな甲斐無く

かへりみてしのぶよすがにだもならぬ斯る別れをいつか思ひし

せめてたゞ戀に終りの無くもがなよりどころなきこのあめつちに

報いなき戀に甘んじ飽く知らず汝をおもふと誰か言はむや

(八七)

あさましく甲斐なく怨み狂へるは命を蛇に吸はるゝに似る

鳥去りてしろき波寄るゆふぐれの沖のいはほか戀にわかれさ

海のごとく男ごゝろ満たすかなしさを静かに見やり歩み去りし子

別れといふそれよりもいや耐へがたしすさみし我をいかに救はむ

(八七)

戀ひに戀ひうつゝなかりしそのかみに寧ろわかれて
あるべかりしを

戀といふつゆよりもいやはかなかるわが生なのなかの
夢をみしかな

わがこゝろ女え知らず彼女かが持つあさきこゝろはわ
れ掬みもせず

再びは見じとさけびしくちびるの乾かはむとする時のさ
びしさ

柱のみ残れる寺の壞あどにまよふよりげにけふははさ
びしさ

いつまでを待ちなばありし日のごとく胸に泣き伏し
詫ふる子を見む

詫びて来よ詫びて来よとぞむなしくも待つくるしき
に男死ぬべき

別れてののちの互いを思ふこと無かるべきなり固く
誓はむ

ふとしては何も思はずいとわさきかりそめごとくに別
れむとおもふ

斯くばかりくるしきものをなにゆゑに泣きて詫ひし
を許さざりけむ

おもひやるわが生のはてのいやはてのゆふべまでを
か獨りなるらむ

やうやうにこゝろもしづみ別れての後のあはれを味
はむとす

思ひ倦み断えみ断えずみわがいのち夜半にぞ風のな
がるゝを聴く

灯赤き酒のまどぬもをはりけりさびしき床に寢にか
へるべし

きはみなき青わだなかにさまよへる海のひゞきかわ
れは生くなり

冷笑すいのち死ぬごとこゝちよく涙ながしてわれ冷
笑す

死ぬばかりかなしき歌をうたはましよりどころなく
身のなりてきぬ

これはこのわが泣けるにはあらざらむあらめづらし
や涙ながるゝ

とりとめてなにかかなしき知らねどもとすればなみ
だ頬をながるゝ

わが痛き生命いのちのひゞきたゞ一ひとに冷笑せうぎょうにのみ生き残る
かも

わがめぐりいづれさびしくよるべなきわかきいのち
が数かずさまよへり

さびしきはさびしきかたへさまよへり淡あはきあはれの
かぎりを知らず

花つみに行くがごとくにいでもきてやがて涙にぬれ
てかへり来ぬ

おほ河のうへをながるゝうたかたのさびしき人のけ
ふも髪をゆふ

富士見えき海のあなたに春の日の安房の渚にわれら
立てりき

おぼろなる春の月の夜落葉のかけのこどもわれの
あゆめり

まどかけをひきてねぬれば春の夜の月はかなしく窓
にさまよふ

首たかくあげては春のそらわふぎかなしげに啼く一
羽の鵝鳥

(五)

彼はよく妻ののろけをいふ男まことやすこし眼尻さ
がりたる

(六)

街なかの堀の小橋を過ぎむとしふと春の夜の風に逢
ひぬる

春の晝街をながしの三味がゆく二階の窓の黄なるま
どかけ

春のそらそれとも見えぬ太陽のかけのほとりのうち
雲のむれ

ひやゝかに梢えだに咲き満ちしらしらと朝づけるほどの
山ざくら花

咲き満てる櫻のなかのひとひらの花の落つるをしみ
じみと見る

かなしめる櫻さくらの聲こゑのまよふめり咲き満てる大樹おほき白晝あき
風もなし

寝ざめゐて夜半に櫻の散るをさく枕まくらのうへのさびし
さいのち

(五六)

海うみなかにうごける青の一點を眼まなこにどこしへに死せし
むるなかれ

(五七)

よるべなみまた懲こゝろりすまに萌もえそめぬあはれやさび
しこのこひこゝる

よるべなき生命いのち生命いのちが對あひまひ居ゐのあはれよるべなき戀
に落ちむとす

はかなかりし戀こゝろのうちなるおもひでのすくなき數かずを
飽あかずかぞふる

かへるべき時し來ぬるかうらやすしなつかしき地へ
いざかへらなむ

知らざりきわが眼のまへに死といふなつかしき母の
とく待てりしを

をさな子のごとくこゝろはかなしみぬふと死になむ
と思ひいたりて

海^{うみ}の邊^へに行きて立てどもなぐさます死をかもへども
なほなぐさます

まことなり忘れぬたりきいざゆかむ思ふことなしに
天^{あま}のあなたへ

根の知れぬかなしさありてなつかしくこゝろをひく
に死にもかねたる

死をおもへば梢はなれし落葉の地^{つち}にゆくよりなつか
しきかな

ゆふ海の帆^ほの上^{うへ}に消えしそよ風のごとくにこの世去
なむぞおもふ

追はるゝごと驚くひまもあらなくに別れきつひに見
ざるふたりは

若うして傷のみしげきいのちなり踰眼としてけふも
あゆめる

然れども時を經ゆかばいつ知らずこのかなしさをま
た忘るべし

ふたゝびはかへり來ることあらざらむさなりいかで
かまたかへり來む

ほのかなるさびしさありて身をめぐるかなしみのほ
てにいまか來ぬらむ

思ふまゝ涙ながせしゆふぐれの室のひとり石にか
も似む

死に隣る戀のきはみのかなしみの一すぢみちを歩み
來しかな

故わかすわれら別れてむきむきにさびしきかたにま
よひ入りぬる

見るかぎり友の顔みな死にはてしきびしきなかに獨りものをふもふ

おぼる夜の停車場内の雑沓に一すぢまじる少女の香あり

疲れはてゝ窓をひらけばおぼる夜の嵐のなかになく駐あり

ゆく春の軒端に見ゆるゆふぞらの青のにごりに風のうごけり

ちやるめらの遠音や室にちらはれる密柑の皮の香を吐くゆふべ

うしなひし夢をさがしにかへりゆく若さいのちのそのうしろかけ

わが生命よみがへり來ぬさびしさに若くさのごとくうちふるへつゝ

わが行くは海のかなぎさの一すぢの白きみちなり限り
とらふ

玻璃戸漏り暮春の月の黄に匂ふ室に疲れてかへり來
しかな

ガラス戸にゆく春の風をきゝながら獨り床敷きども
しびを消す

四月すゑ風みだれ吹くこよひなりみだれてひとのこ
ひしき夜なり

あめつちのみどり濃き日となりぬ我等きそうてかな
しみにゆく

また見じと思ひさだめつさりげなく静かにひとを見
て別れ來ぬ

眞晝の日そらに白みぬ春暮れて夏たちそむる嵐のな
かに

たゞ一歩踏みもたがへて西ひがしわが生のかざりと
ほく別れぬ

うす潤る地平のはての青に見ゆかすがに夏のとゞろ
ける雲

めぐりあひやがてたゞちに別れけり雨ふる四月すゑ
の九日

ゆく春の嵐のみだれ雨のみだれしづかにひとゝ別る
ゝ日なり

かなしみの歩みもく音のかすかなり疲れし胸をとほ
くめぐりて

しめやかに嵐みだるゝはつ夏の夜のおはれを寝ざめ
ながむる

(108)

夏を迎ふかもひみだれてかさにとりつかれしむねは
歌もうたはず

(109)

旅人あり街の辻なる練瓦屋の根に行き倒れ死にはて
ゝける

いつしかに春は暮れけりこゝろまたさびしきまゝに
はつ夏に入る

空のあなた深さみどりのそこひよりさびしき時にか
よふひゞきあり

あそあそと若葉萌えいづる森なかに一もと松の花咲
きにけり

底知らず思ひ沈みて眞晝時一樹の青のたかさにむか
ふ

大木の幹の片へのましろきにこぼれぬる日の夏のか
なしみ

窓ちかき水田のなかの榛の木の日かげに青み嵐する
なり

大木の青葉のなかに小鳥啼く細かに晝の日をみだし
つゝ

とりみだし哀しみさけび譚嘆すあゝあめつちに夏の
來れる

生くといふ否むべからぬちからよりのがれて戀にす
がらむとしき

ひやゝにことは終りき別れてき斯くあるわれをつく
づくど見る

思ひいでゝなみだはじめて頬をつたふ極り知らぬわ
かれなりしかな

女ひとり棄てしばかりの驚きに眼覺めてわれのさび
しさを知る

甲斐もなくしのびしのびにいや深にひとに戀ひつゝ
衰へにけり

忽然と息断えしごとく夜ふかく寐さめてひとをおも
ひいでしかな

怨むまじやなにかうらみむ胸のうちのゆかしきこゝ
ろ斯くちかひける

ありし夜のひとの枕に敷きたりしこのかひなかも斯
く瘦せにける

わが戀の終りゆくころとりどりに初なつの花の咲き
いでにけり

音もなく人等死にゆく音もなく大あめつちに夏は來
にけり

海、山のよこたはるごとくおこそかにわが生くとふを
信せしめたまへ

きはみなき生命いのちのなかのしばらくのこのさびしさを
感謝しまつる

あなさびし白晝まひらを酒に酔ひ痴れて臯月大野の麥畑を
ゆく

青草によこたはりゐてあめつちにひとりなるものゝ
自由をおもふ

(1110)

畑はたけなかにふと見いでつる瘦馬うせうまの草食くさくみるたり水無月
眞晝

(1111)

ひやゝにつひに眞白き夏花のわれ等がなかにあり終
るべし

棕櫚せうりの樹きの黄色きいろの花のかけに立ち初夏の野をどほく
ながむる

初夏の野すゑの川の濁れるにも、屍ひらの浮きしづみ
行く

けだものはその死處とこしへにひとに見せずと聞き
つたへけり

水無月の洪水なせる日光のなかにうたへり
女 麥かり少

遠くゆきまたかへりきて初夏の樹にきてゆなり眞晝
日の風

木陰よりなぎさに出でぬ渚より木かげに入りぬ海鳴
るゆふべ

みじか夜のころにはじめてそひねしてものゝあはれ
を知らそめしかな

松咲きぬ楓もさきぬはつ夏のさびしさはなの咲きそ
めにけり

郊外に友のめうどのかくれ住む家をさがして麥畑を
ゆく

夜のほかに湖みはてぬる夏草の花あり朝の瓶の白さ
よ

少女子の夏のころもの襪にゐて風わたるごとくうご
くかなしみ

母となりてやがてつとめの終りたるをみな顔に眼
をどめて見る

停車場に札を買ふとき白銀の貨のひゞきの涼しさ夜
なり

夏深しかの山林のけだものゝごとく生きむと雲を見
ておもふ

麥の穂の赤らむころとなりけりひと棄てしのちの
はつ夏に入る

いつ知らず夏も寂しう更けそめぬほのかに合歡の花
咲きにけり

わがこゝろ動くともなく青草に寢居つゝ空の風にし
たがふ

夏草の延び青みゆく大地を静かに踏みて我等わゆめ
り

深草の青きがなかに立つ馬の肥えたる脚に汗の湧く
見ゆ

夏白晝うすくれなるの蓄薇よりかすかに蜂の羽音き
こゆる

わが友の妻とならびて椽に立ち眞晝かへでの花をな
がむる

麥畑の夏の白晝のさびしさやふと讚美歌のくちびる
に出づ

黄なる麥一穂ぬきどり手にもちて雲なきもとの高原
をゆく

高原や青の一樹とはてしなき眞白き道とわがまへに
見ゆ

麥畑のなかにうごける農人を見るつゝなみだしづか
にくだる

わが顔もあかぐねいろに色づさぬ高原の麥は垂穂し
にけり

ひやゝかに涙はひとりながれたりこゝろうれしく死
なむとおもふに

われみづから死をしたしくおもふころ誰彼ひとのよ
く死ぬるかな

火の山にけむりは断えて雪つみぬしづかにわれのい
つか死ぬらむ

渚より海見るごとく汪洋とながるゝ死のまへにたゝ
すむ

もの思へばおもひのはてにつねに見ゆ死といふもの
ゝなつかしきかな

夏白晝あるかなさかのさびしさのこゝろのうへに消
えがてにする

松葉散る皐月の暮の或るゆふべをんな棄てむと思ひ
たらしき

影のごとくこよひも家を出でにけり戸山が原の夕雲
を見に

臯月ゆふべ梢はなれし木の花の地に落つる間のあま
きかなしみ

ひとつひとつ足の歩みの重き日の臯月の原に頬白鳥
の啼く

日かけ満てる木の間は青き草をしき梢をわたる晝の
風見る

見てあればかすかに雲のうごくなり青草のなかによ
こたはるどき

(三三)

わがいのち空にみちゆき傾きぬあなかなすかなり遠は
どゞぎす

たそがれの沼尻の水に雲うつる麥刈る鎌の音もきこ
え来る

なつかしき臯月の岡のゆふぐれの青の大樹の蔭に如
かめや

落日のひかり梢を去りにけり野すゑをどほく雲のあ
もめる

(三三)

けむりありほのかに白し水無月のゆふべうらがなし
野羊の鳴くあり

わが行けばわがさびしさを吸ふに似る夏のゆふべの
地のなつかし

麥すでに刈られしあどの畑なかの徑こうちを行きぬ水無月
ゆふべ

椅子いすに耐へず室むろをさまよひ家をいで野に行きまたも
椅子にかへりぬ

(111)

野を行けば麥は黄ばみぬ街のけばらすき衣ころもををんな
着にけり

(112)

やうやうに戀ひうみそめしそのころにとりわけ接吻せつぶん
をよくかはしける

強いられて接吻せつぶんするときよ戸の面おもてには夏の白晝はくしつを一いち
樹いそよがす

いちいちに女おんなの顔かほの異ことるを先づ第一の不思議とぞお
もふ

六月の濁れる海をふとおもひ午後あわたゞし品川へ
行く

どかくして動きいでたる船蟲の背になまぐさき六月
の日よ

月いまだひかりを知らず水無月のゆふべはながし汐
の満ち来る

海のうへの月のはどりのうす雲にはのかに見ゆる夏
のあはれさ

少女等のかろき身ぶりを見てあればものぞかなしき
夏のゆふべは

いさゝかを雨に濡れたる公園の夏の大路を赤き傘ゆ
く

桐の花落ちし木の根に赤蟻の巢ありもふべを雨こぼ
れ来ぬ

枝のはし三つほを咲けるうす紅の楓のはなに夕雨の
見ゆ

いたづらに麥は黄ばみぬ水無月のわがさびしさにつ
ゆあづからず

八月の街を行き交ふ群集の黙せる顔のなつかしきか
な

どこしへに逢ふこと知らぬむきむきのこゝろこゝろ
の寂しき歩み

あめつちに獨り生きたりあめつちに断えみたえすみ
ひどり歌へり

(118)

六七月の頃を武蔵多摩川の畔なる百草
山に送りぬ、歌四十三首

(119)

涙ぐみみやこはづれの停車場の汽車の一室にわれ入
りにけり

どもすればわが蒼ざめし顔のかけ汽車のガラスの戸
にうつるあり

雨白く木の間につぶる高原を走れる汽車の窓により
そふ

水無月の山越え來ればそちこちの木この間に白く栗の
咲く見也

とびとびに落葉せしごとわが胸にさびしさ散りぬ頬ほ
白鳥びの啼く

啼きそめしひとつにつれてそちこちの山の月夜に梟
の啼く

たそがれのわが眼のまへになつかしく木の葉そよげ
り梟の啼く

〇三〇

夕山ゆふの木の間にいつか入りも來ぬさだかに物をおも
ふとなしに

〇三一

あをばといふ山の鳥啼くはじめ無く終りを知らぬさ
びしき音ねなり

わがこゝろ沈み來ぬれば火の山のけむりの影をつね
にやどしぬ

檜ひの林松しょうのはやしの奥ふかくちひさき路にしたがひ
て行く

青海のうねりのごとく起き伏せる岡の國ありほどゝ
ぎす行く

わが死にしのちの静けき斯る日にかく頬白鳥の啼き
つゞくらむ

紫陽花のその水いろのかなしみの滴るゆふべ蝸のな
く

煙青きたばこを持ちて家を出で林に入りぬ雨後の甲
す

（110）

拾ひつるうす赤らみし梅の實に木の間のきつゝ齒を
あてにけり

かたはらの木に頬白鳥の啼けるありこゝる恍たり眞
晝野を見る

日を浴びて野するにとほく低く見ゆ涙をさそふ水無
月の山

松林山をうづめて静まりぬどほくも風の消えゆける
とき

（111）

眞晝野や風のなかなるほのかなる遠き杜鵬とくげんの聲きこ
え來る

梅雨つゆ晴の午後のくもりの天地あまつちのつかれしなかにほと
ゝぎす啼く

山に來てはのかにかにもふたそがれの街にのこせしわ
が靴の音

或るゆふべ思ひがけなくたづね來しさびしき友をつ
くづくと見る

幹白く木の葉青かる林間りんかんの明るきなかに歩み入りに
き

わが行けば木々の動くがごとく見ゆしづかなる口の
青き林よ

かなしめる獸のごとくさまよひぬ林は深し日は狭青さあせ
なり

はてしなくあまたの岡の起き伏せり眼に日光ひかりの白く
満つかな

別るべくなりてわかれし後の日のこのさびしさをいかに追ふべき

棄て去りしのちのたよりをどりどりに思ひつくりて夜々をなぐさむ

ゆめみしはいづれも知らぬ人なりき寝ざめさびしく君に涙す

あるときはありのすさみに憎かりき忘れがたくなりし歌かな

遠くよりさやさや雨のあゆみ来て過ぎゆく夜半を寝ざめてありけり

ゆくりなくとあるゆふべに見いでけり合歡わがのこすゑの一ふさの花

きはみなき旅の途なるひとりぞとふとなつかしく思ひいたりぬ

六月の山のゆふべに雨晴れぬ木の間になし日のながれたる

ゆふぐれの風ながれたる木の間ゆきさやかにものを
思ひいでしかな

ゆふ雨のなかにほのかに風の見ゆ白夏花のそほ濡れ
て咲く

はるばると一すぢ白き高原のみちを行きつゝ夏の日
を見る

放たれし悲哀のごとく野に走り林にはしる七月の
かせ

かなしきは夜のころもに更ふる時おもひいづるが
つねとなりぬる

鋭くもわかき女を責めたりきかなしかりにしわがい
のちかな

七月の山の間日光のあをうよとむに飛ぶつばめ
あり

暈帯びて日は空にあり山々に風青暗しほどゝぎす
暗く

生くことのもうくなりしみなもとに時におもひの
たせりゆくあり

うち断えて杜鵑トビを聞かすうす青く松の梢ミに實の満ち
にけり

わがこゝろ静かなる時につねに見ゆ死しといふものゝ
なつかしきかな

獨り歌へる 下の巻終り

110

明治四十二年十二月廿三日印刷
明治四十三年一月一日發行

獨り歌へる
定價金四十五錢

著者 若山 繁

發行者 名古屋市南区熱田市場町拾五番地 加藤新藏

印刷者 名古屋市南区熱田傳馬町拾七番地 伊野佐重

印刷所 名古屋市南区熱田傳馬町拾七番地 清岡社

發行所 名古屋市南区熱田須賀町四拾八番目 八少女會

賣捌所 東京市神田區表神保町 東京堂
名古屋市南区熱田市場町 尙友堂